

## 近世スウェーデン経済史概観

玉 木 俊 明

### 目 次

はじめに

1. 外国貿易の変遷—ストックホルムを中心に
2. 貿易商品の変化
3. スtockホルムの地位の低下

おわりに

### は じ め に

スウェーデン経済史に関しては、ヘクシャー<sup>1)</sup>、マグヌソン<sup>2)</sup>による本格的な概説がすでに上梓されている。前者はその詳細さにおいて、後者はそれが取り扱う時代の長さにおいて、他に例をみないほどである。このように他を圧倒する研究に対し、私のような極東のエトランジェに付け加えられるものはたしてありうるのだろうか？ このような疑問が湧いて、むしろ当然だろう。ここではまず、私がどのような点で貢献可能かを説明しておかなければなるまい。

スウェーデンの経済史学界では、スウェーデン経済史とは基本的に現在のスウェーデン領の経済史のことを意味し、かつて同国の一部をなしていたフィンランドへの関心は極めて薄い。また、ヘクシャー、マグヌソンの両大家ともに、一国史観の色彩が濃く、スウェーデンの内生要因で経済変動を説明する傾向がある。私は本稿では、フィンランドとの関係及び外生要因を重視した論を展開したい。

近世スウェーデンの政治史は、大きく「大国の時代」Stormaktstiden (1611–1718)と「自由の時代」(1718–1772) Frihetstiden、さらにグスタヴ3世の統治を中心とする「グスタヴの時代」Gustavianskatiden (1772–1809)に分かれる。大国時代にスウェーデンの領土は大きく拡張し、大北方戦争に敗北することで縮小し、「自由の時代」をむかえる。さらに、「グスタヴの時代」には、ナポレオン戦争に巻き込まれる。

このように、スウェーデンの領土は大きく変化した。国制的には、絶対王政から議会制民主主義、さらにまた絶対王政へという転換があった<sup>3)</sup>。しかし経済的には、近世を通じて基調となる政策が

1) Eli F. Heckscher, *Sveriges Ekonomiska Historia från Gustav Vasa*, Vols. 4, 1935–49.

2) Lars Magnusson, *Sveriges Ekonomiska Historia*, Stockholm, 1996.

3) 入江幸二『スウェーデン絶対王政研究——財政・軍事・バルト海帝国——』知泉書館, 2005年を参照のこと。

あった。重商主義政策がそれである。国制上の変化は、貿易政策には影響しなかった。このように、貿易と政治体制の乖離を考えれば、経済史研究における外生要因の重要性を無視するわけにはいかない。

母国史家は、おうおうにして、内生要因を重視する傾向が強い。スウェーデンの帝国主義的發展を論じたマイケル・ロバーツはイギリス人であったし<sup>4)</sup>、スカンディナヴィアとヨーロッパ世界経済の関係を論じたマールベリは、イエール大学に博士論文を提出した<sup>5)</sup>。外国人歴史家の方が、外生要因を重視しがちだといえるだろう。本稿でもその例に漏れず、外生要因に重きをおき、近世スウェーデン経済史の特徴を述べたい。それは、これこそが、極東のエトランジェが本国のスウェーデン史家に対して貢献できる数少ない方法だからである。

### 1. 外国貿易の変遷—ストックホルムを中心に

伝説によれば、ストックホルムは、1250年代に起源があり、リューベック商人によって建設された。元来は島であったガムラ・スタン（旧市街）を中心に発達する。

この時代のストックホルムについては、もう少し詳しく説明しておかねばなるまい。この都市は、現在とは違った位置に存在していたからである。ガムラ・スタンは、今日のストックホルム中心街のやや外側にある島のことである。近世には、ここに多くの外国人卸売商人が住み、外国貿易に従事した。彼らは、スウェーデン語で Skeppsbroadeln 「波止場貴族」と呼ばれ、Skeppsbro 「シェップスブロー＝波止場」に居住していた。より正確には、ガムラスタンのシェップスブローに沿って、合計20のブロックに居住していた<sup>6)</sup>。彼らが、ストックホルムの経済発展の担い手として活躍した。

ストックホルムは、近世に急速に発展する。1580年代約8,000人にすぎなかった人口が、1663年には4万人近くにまでなる。18世紀になるとスウェーデンの都市人口の三分の一はストックホルムが占めるようになり、1760年代のストックホルムの人口は、7万人台になる。ストックホルムを中心として、スウェーデンが鉄輸出の急増に成功したことが、その大きな理由となっている<sup>7)</sup>。

スウェーデンの地位が高まった一つの要素として、14世紀に成文化された「ボスニア海域商業強制」があげられる。オーボ市民を重要な地域の人々は、ストックホルム以外のいかなる地でも船でも商業を行なってはならない、と決められた<sup>8)</sup>。ストックホルムはこのようにして、スウェーデン

4) Michael Roberts, *The Swedish Imperial Experience, 1560–1718*, Cambridge, 1979.

5) 彼の博士論文は、書物として上梓された。John P. Maarbjerg, *Scandinavia in the European World-Economy, ca. 1570: Some Local Evidence of Economic Integration*, New York, 1995.

6) Klas Nyberg, “The ‘Skeppsbro Nobility’ in Stockholm’s Old Town 1650–1850: A Research Program on the Role and Significance of Trade Capitalism in Swedish Economy and Society”, *Uppsala Papers in Economic History*, Research Report No. 49, 2001.

7) 根本聡「海峽都市ストックホルムの成立と展開——メーラレン湖とバルト海のあいだで——」村井章介責任編集『シリーズ港町の世界史1 港町と海域世界』青木書店、2006、366–368.

で最も重要な港になっていくのである。しかし、サンドストレームの言葉を借りれば、同市は、「非常に小さなケーキのなかの大きなかけら」<sup>9)</sup>にすぎなかった。しかし、ストックホルムは「非常に小さなケーキのなかの大きなかけら」ではなく、ヨーロッパでも有数の貿易都市の一つになったのである。では、それはなぜか。

スウェーデン国内の鉱物資源のほかに、フィンランドからストックホルムに輸送されるピッチ・タールがストックホルムに輸送された、なかでも東ボスニアからの輸入が突出しており、1686年には全体の90.1%を占める<sup>10)</sup>。ボスニア湾での貿易は、おそらくスウェーデンがバルト海南岸にまで進出するための、予行演習の場になったものと思われる。

ストックホルムは、鉄・銅・真鍮などの鉱物資源と、主としてフィンランドから持ち込まれるピッチ・タールを輸出するステーブル市場として17世紀に台頭する。ストックホルムは、スウェーデン（フィンランドを含む<sup>11)</sup>）の産物の輸出をベースとして貿易を拡大していくのである。それは、スウェーデンがヨーロッパ世界経済に組み込まれる過程でもあった。ストックホルムこそは、スウェーデンがヨーロッパ世界経済に組み込まれる際の鍵となった都市だったのである。

さらにスウェーデンの貿易においては、外国商人の果たす役割が大きかったことは強調に値する。ストックホルムの発展には、当初から外国人の力が大きく作用していた。リューベック商人が建設したこともあり、ストックホルムの貿易は、当初から、ハンザ商人との関係が大きかった<sup>12)</sup>。この分野に関しては、クムリエンの研究が最も重要である。彼によれば、13世紀中葉から、ドイツ商人がスウェーデンに移住するようになった<sup>13)</sup>。特にリューベックとの関係が強く、1572年から85年をみると、ストックホルムから輸出される銅のうちリューベックに輸出される割合60%を超える<sup>14)</sup>。またレオス・ミュラーによれば、ストックホルムの輸出は、1600年にはリューベックとダンツィヒというハンザ都市が中心だったのが1650年にはオランダが中心になる<sup>15)</sup>。さらにミシェル・ド・ヨンは、「グスタヴ1世ヴァーサからグスタヴ2世アドルフにいたるまで（1523–1632）、スウェーデン国家と経済は、外国の資本・技術・商業知識・貿易によって徐々に変化した。スウェーデンの勃興が決定的になったのは、グスタヴ2世アドルフと宰相アクセル・オクセンシエーナの、

8) 根本「海峡都市ストックホルムの成立と展開」384, 386–387。

9) Åke Sandström, *Mellan Torneå och Amsterdam: En undersökning av Stockholms roll som förmedlare av varor i regional-och utrikeshandel 1600–1650*, Stockholm, 1990, 20.

10) Sven-Erik Åström, “From Tar to Timber. Studies in Northeast European Forest Exploitation and Foreign Trade 1660–1860”, *Commentationes Humanum Litterarum*, LXXXV, 1988, 24–25, Table I: 6.

11) この頃のフィンランドの貿易については、Arnold Soom, “Zur Geschichte des Handels zwischen Reval und Finland im 17. Jahrhundert”, *Annales Societatis Litterarum Estonicae in Svenica*, IV, Stockholm, 1966, 123–133.

12) ハンザとスカンディナヴィアとの関係については、A. E. Christensen, “Scandinavia and the Advance of the Hanseatics”, *Scandinavian Economic History Review*, Vol. 5, No. 1, 1957, 89–117.

13) Kjell Kumlien, *Sverige och Hanseaterna: Studies i Svensk Politik och Utrikeshandel*, Stockholm, 1953, 61.

14) Kumlien, *Sverige och Hanseaterna*, 480.

15) レオス・ミュラー著（玉木俊明・根本聡・入江幸二訳）『近世スウェーデンの貿易と商人』嵯峨野書院、2006, 35.

1619-32年の努力によるところが大きかった」<sup>16)</sup> という。

このような変化は、そのままヨーロッパ世界経済の勢力図の変遷を反映する。すなわち、ハンザの勢力が衰退し、オランダのそれが台頭していくのと同じ軌跡を描いている。そして、オランダからの移民によって、スウェーデンの鉱山資源は大いに開発される。とりわけスウェーデン鉄工業に対して、ルイ・ド・イエール Louis de Geer が大きく貢献したとされる<sup>17)</sup>。

ルイ・ド・イエールは、スウェーデンに渡ったウィレム・ファン・ベスヘ家 Besche と同様、リエージュの出身であった。このリエージュ・ネットワークが、オランダ、さらにはスウェーデンの経済発展に寄与したのである<sup>18)</sup>。

オランダは、もともとドイツやスペインから鉄を輸入していたのだが、三十年戦争の影響で、それが不可能になった。その代役として登場したのが、スウェーデンである。スウェーデンには、鉱物資源開発のための資金——場合によってはノウハウ——が決定的に不足していた。それらを提供したのがオランダであった<sup>19)</sup>。ただしここで注意しておかなければならないが、鉱山開発の資金を提供したのがオランダであったとしても、技術的ノウハウを提供したのはリエージュだったことである。アムステルダムは、リエージュの鉱山業のノウハウがスウェーデンに伝わるための「ゲートウェイ」<sup>20)</sup>の役割を果たした。したがってオランダ人がスウェーデンの鉱工業で演じた役割は、過大評価されてきたというべきだろう。

とはいえ、ルイ・ド・イエールがスウェーデン鉱山業の発展に大きく寄与したことも事実である。スウェーデンの製鉄集落 bruk<sup>21)</sup>の開発に、多大な貢献をした。17世紀前半には、スウェーデンからの銅と鉄の最大の輸出先はオランダであった。そしてトリップ家をパートナーとして、1610年

16) Michiel de Jong, “Dutch Entrepreneurs in the Swedish Crown Trade, 1580–1630”, Hanno Brand, (ed.), *Trade, Diplomacy and Cultural Exchange: Continuity and Change in the North Sea Area and the Baltic ca. 1350–1750*, Groningen, 2005, 43.

17) ルイ・ド・イエールについては、なかんずく、E. W. Dahlgren, *Louis de Geer 1587–1652: Hans lif och verk*, 2 vols, 1923, repr. Stockholm, 2002; 邦文文献では、上野喬『オランダ初期資本主義研究』御茶の水書房, 1973年, 187–246.

18) Maj-Britt Nergård, *Mellan krona och marknad: Utländska och svenska entreprenörer inom svensk järn hantering från ca 1580 till 1700*, Uppsala, 2001, 104–154; Mannus Märner, *Människor, Landskap, varor and Vägarna Essäer från svenskt 1600- och 1700-tal*, Stockholm, 64.

19) ミュラー『近世スウェーデンの貿易と商人』。

20) 「ゲートウェイ」とは、オランダ史家クレ・レスハーの造語であり、後背地とそれ以外の地域を結ぶ拠点を指す。Clé Lesger, *Handel in Amsterdam ten tijde van de Opstand: Koopliden, commerciale expansie verandering in de ruimtelijke economie van de nederlanden ca. 1550–ca. 1630*, Hilversum, 2001; *The Rise of the Amsterdam Market and Information Exchange: Merchants, Commercial Expansion and Change in the Spatial Economy of Low Countries, c. 1550–1630*, Aldershot, 2006.

21) この問題に関しては、邦文文献として、根本聡「スウェーデン鉄とストックホルム—鉱山業における国家と農民—」『ヨーロッパ文化史研究』第6号, 2005年3月, 75–92. brukは、英語では iron-works と通常訳されるが、単なる製鉄所ではない。それは一つの集落であり、住居はむろん、場合によっては学校や病院までも含む。したがって、集落としての機能をもつ。

代から、銅・鉄、さらには鉄製銃器の販売を独占した。1630年代には、毎年1,000挺以上の鉄製銃器を販売したのである<sup>22)</sup>。スウェーデンにおけるルイ・ド・イエールと、オランダにおけるトリップ家との共同事業は、オランダの武器市場の発展もうながした。

トリップ家に関しては、クレインの古典的研究があり<sup>23)</sup>。今日まで大きな影響を及ぼしている。トリップ家はいわば「死の商人」であり、鉄・銅などの独占をしたという。

しかしながらクレインの研究は、オランダ側の史料にのみとづいており、本来必要だったスウェーデン側の史料を使っていないという憾みがある。その問題点を克服したのが、ミシェル・ド・ヨンの博士論文である<sup>24)</sup>。しかもド・ヨンの研究は、クレインの研究ではあまり取り扱われなかった武器貿易を中心に分析を行なっている。

1568年の八十年戦争開始時にはオランダにおける武器産業は経済全体のごく僅かな役割しか果たしていなかったが、終了時の1648年には、無視しえないほど巨大なものとなった。オランダ共和国は、直接的にも間接的にも、武器貿易を支援したのである。さらに最大の武器消費者は、オランダ東インド会社(VOC)であった。オランダでは武器産業が発達し、武器貿易商人は、スウェーデン、デンマーク、イングランド、モスクワ、フランス、ヴェネツィアにまで、場合によっては、敵国のスペインにも武器を売った。オランダの武器製造産業は、急速に発達した。スウェーデン-オランダ間の貿易が増えた。1630年代には、オランダにとってスウェーデン産の銅は、大砲の製造に欠かせないものとなり、鉄製銃器は、イングランドではなくスウェーデンから輸入されるようになった。ヴァイオレット・バーバーによれば、「三十年戦争のあいだ、アムステルダムのだ・イエール家の倉庫は、グスタヴ2世・アードルフの軍隊とオランダ連邦議会のみならず、デンマークやフランスの軍隊にも武器を提供した。……1627年から41年にかけて、リシュリューは、銅・硝石・火薬・弾丸・マスケット銃・大砲をアムステルダムで購入したのである」<sup>25)</sup>。

上述のようなオランダ-スウェーデン複合体(Dutch-Swedish Complex)は武器の製造と貿易を行ない、それがヨーロッパ全土にわたる影響をもちえたのである。ただし、ド・イエールとトリップ家のパートナーシップ関係は1631年に終わり、以降、トリップ家の親族によるパートナーシップ経営で武器貿易がなされるようになる<sup>26)</sup>。

しかしながら、オランダの優位は、17世紀後半になると大きく変わる。イギリス商人が台頭す

22) ミュラー『近世スウェーデンの貿易と商人』14-21。

23) Peter Klein, *De Trippen in de 17e eeuw: Een studie over het ondernemersgedrang op de Hollandse stapelmarkt*, Assen, 1965.

24) Michiel de Jong, 'Staat van Oorlog': *Wapenbedrijf en Militaire Hervorming in de Republiek der Verenigde Nederlanden, 1585-1621*, Hilversum, 2005.

25) Violet Barbour, *Capitalism in Amsterdam in the Seventeenth Century*, Toronto, 1963, 27.

26) Joost Jonker and Keetje Sluyterman, *At Home on the National Markets: Dutch International Trading Companies from the 16<sup>th</sup> century until the Present*, The Hague, 2000, 60; ただし、スウェーデンから鉄や銅を輸入しなければならなかったのだから、あまりにアムステルダムの自立性を強調することはできない。

るからである。この時代については詳しい研究はないが、18世紀ストックホルム商人の世界については、つとにクルト・サムエルソンによって、かなり明らかになっている<sup>27)</sup>。輸出面でみれば、重要な商會はごく限られており、1730年代には、7人の主導的商人だけで、スウェーデンの鉄貿易の半分程度を占めていた。その7人のうち、5人がイギリスの出身であった。オランダ出身はクラス・グリル Claes Grill ただ1人だけであった<sup>28)</sup>。

スウェーデンにおける主要な外国商人がオランダ人からイギリス人に変化することは、オランダからイギリスへという、ヨーロッパ世界経済のヘゲモニーの変化と連動していたのである。

## 2. 貿易商品の変化

次に、貿易商品の変化に目を向けよう。まずは、輸出からみていこう。

表1から紛れもなく明らかになるのは、銅・鉄・鋼鉄という、鉱物資源の輸出の割合が極めて大きいということである。当初は銅の比率が高いが、やがて鉄・鋼鉄に取って代わられている。鉱物資源に次いで重要なのは、ピッチ・タールである。また、1637年、1640年に関しては、穀物の輸出も多く、16%以上ある。

ところで、鉱物資源はスウェーデンのどの港から西欧に送られたのか。スウェーデン本国の代表的貿易港であるストックホルムとイエーテボリから輸出される鉄の割合を比較してみよう。1681/85年はストックホルム 82.6 対 14.4 だったのが、1716/20年には、69.6 対 30.4 となる<sup>29)</sup>。イエーテボリの比率が高まっていくとはいえ、この時代はまだストックホルムからの輸出量が圧倒的に多

27) Kurt Samuelsson, *De Stora köpmanshusen i Stockholm 1730–1815: En Studie i svenska handelskapitalismens historia*, Stockholm, 1951.

28) ミュラー『近世スウェーデンの貿易と商人』68–70。クラス・グリルについては、Leos Müller, *The Merchant Houses of Stockholm, c. 1640–1800: A Comparative Study of early-Modern Entrepreneurial Behaviour*, Uppsala 1998; サムエルソンはまた、スウェーデン商家の信用取引について研究している。ただし、本章での対象よりもあとの時代を考察の対象にしている。それによれば、アムステルダムやハンブルクの商人が手形割引仲買人 discount broker として活躍することがわかる。また、イングランドへの鉄輸出が多かったにもかかわらず、ロンドンへの振出手形あまりみられなかった。ここから、18世紀のハンブルクは重要な金融都市であったことがここからも判明する。おそらく一般的に、18世紀の国際貿易におけるロンドン金融市場の役割は過大評価されている。Kurt Samuelsson, “Swedish Merchant-Houses, 1730–1815”, *Scandinavian Economic History Review*, Vol. 3, No. 2, 1955, 163–202; また、スウェーデンの研究においては、鉄輸出商人に占めるユグノーの重要性が軽視される傾向にある。フランスの歴史家ピエリク・ブルシャスによれば、ストックホルムではユグノーが帰化できたので、この地で鉄の輸出商人として活躍することもあった。したがってフランスからストックホルムに亡命したユグノーも、イギリスとの貿易で活躍したのである。Pierrick Pourchasse, *Le commerce du Nord: Les échanges commerciaux entre la France et l’Europe septentrionale au XIIIe siècle*, Rennes, 2006, pp. 210–215; この問題については、以下の文献も参照。Thomas Lindblad, *Sweden’s Trade with the Dutch Republic 1738–1795: A Quantitative Analysis of the Relationship between Economic Growth and International Trade in the Eighteenth century*, Assen, 1982.

29) B. Boethius och Eli F. Heckscher (red.), *Svensk Handelsstatistik, 1637–1737*, Stockholm, 1938, LVIII.

表1 スウェーデンの輸出品

[単位] %

	1637	1640	1642	1645	1649	1661	1685	1724	1746/50	1776/80
鉄・鋼鉄	35.4	39.3	43.2	53.6	46.7	58.2	57	73	73.6	58
銅・黄銅	27.3	20	33.8	29.8	33.3	24.3	23.5	10	6.3	9.7
ピッチ・タール	7.9	10.8	23	16.6	20	17.5	19.5	17	—	12.1
木材	4.1	4.3	3.4	3.2	5.2	4.1	2.4	6.1	5.2	7.2
穀物	16	16.8	2.8	1.4	2.7	1	0.1	—	—	—
獣皮・毛皮	2.4	2.3	1.8	1.1	1.5	0.8	0.1	—	0.1	0
魚	0.1	0.3	0.2	0.1	0.1	0	0.5	—	0	5.8
バター・脂		0	—	—	—	—	—	—	0	0
その他	6.8	6.2	5.4	4.3	4.4	5.6	8.3	3.9	14.8	7.2

[出典] B. Boethius och E. F. Heckscher (red.) *Svensk Handelsstatistik 1637-1737*, Stockholm, 1938, LI.

い<sup>30)</sup>。

次に、ストックホルムから輸出される銅と棒鉄の主要相手先をみてみよう。銅の場合、輸出先として、1642年にはオランダが73%を占めていたのが、1729年には19%に低下する。それに対し、1642年にはまったくなかったルアンが、1729年には23%にまで増える。棒鉄に関しては、1642年にはオランダの比率が52%、イングランドのそれが9%だったのが、1729年にはそれぞれ16%と39%になり、逆転する。また、リューベックの比率が高いことにも注目すべきである。1642年にはストックホルムから輸出される銅の22%が1694年には、35%がリューベックに送られている。棒鉄に関しては、1646年には、21%がリューベックに輸出された<sup>31)</sup>。

銅輸出の重要性は、時代と共に下がっていく。1625年に銅本位制を採用したほど、銅が豊富であったスウェーデンではあるが、銅の輸出量は、1631-40年をピークに減少する傾向にあるからである<sup>32)</sup>。スウェーデン経済における銅の重要性も下がった。またヘクシャーによれば、スウェーデンにおける銅の生産は、1620年代には年平均1,300-1,500トンほどであったが、最盛期である1650年には、3,000トン近くにまで達した。そして1680年代には1,600-1,900トンに下がっている<sup>33)</sup>。スウェーデンの経済において、銅よりも、鉄の方が明らかに重要になって来るのである。

30) 貿易都市としてのイエーテボリの役割は、18世紀にはさらに大きくなる。1731年にスウェーデン東インド会社が設立され、同市が根拠地になることから、それは推察されよう。ただしイエーテボリの国際貿易に関する主立った研究はダールヘーデの手になるものであり、極めて優れているが、17世紀を扱っているにすぎない。Christina Dalhede, *Handelsfamiljer på Stormaktstidens Europamarknad: resor och resande i internationella förbindelser och kulturella intressen: Augsburg, Antwerpen, Lübeck, Göteborg och Arboga*, Göteborg 2 Vols; Christina Dalhede, *Viner Kvinnor kapital: 1600-talshandel met potential*, Göteborg, 2006; スウェーデン東インド会社については、ミュラー『近世スウェーデンの貿易と商人』をみよ。また、以下の文献も参照。C. Konincxx, *The First and Second Chapters of the Swedish East India Company 1731-1766*, Kortrijk, 1980.

31) Boethius och Heckscher, *Svensk Handelsstatistik*, 646, 647, 658, 746, 748, 775.

32) Heckscher, *An Economic History of Sweden*, 88-91.

33) Eli F. Heckscher, "Den europeiska kopparmarknaden under 1600-talet", *Scandia*, Vol. 11, 1938, 238.

表2 スウェーデンの輸出品

[単位] %

	1637	1640	1642	1645	1649	1661	1685	1724	1746/50	1776/80
繊維製品 (完成品)	41.5	37.6	35.5	37.5	38.1	30	31.3	13.6	5.6	4.7
繊維原料	—	—	5.9	0	—	—	2	—	17.6	19.1
香料	29.5	19.5	24.8	20.5	21.8	10.4	14.4	5.8	8.5	
食糧	16.1	12.2	23.8	21.5	5.6	3.7	30.4	37.5	51.9	41
穀物	—	—	0.4	0.2	—	—	12.6	27	28.8	24.2
塩	9.5	—	10.2	2	—	—	11	2.6	4.4	5.7
魚	1.2	1.9	4.8	5.1	5.6	3.7	4.3	3.9	8.2	1.1
家畜肉	5.4	10.3	8.4	14.2	—	—	1.2	3.5	4.8	3.5
飲料	13.5	15.5	13.6	14.7	14	18.6	8.2	7.9	5	4.6
その他	28.9	5.2	1.7	1.5	21.8	25.9	15.8	26.6	19.1	22.1

[出典] B. Boethius och E. F. Heckscher (red.) *Svensk Handelsstatistik* 1637–1737, Stockholm, L.

スウェーデンはヨーロッパで第一の鉄輸出国であった。そのスウェーデンの鉄は、棒鉄の形態で、ストックホルム——ないしエーテポリ——からヨーロッパ諸国に輸出された。17世紀後半から、スウェーデンの最大の鉄輸先はイングランドになる。

スウェーデンの鉄輸量は、1680年代から急激に下がっている。そして大北方戦争中の1711–20年から急増している。したがってスウェーデンの貿易にとって、大北方戦争の影響はあまり大きくなかったと考えるべきであろう。

さて、輸入の話題に移ろう。表2はスウェーデン本国の輸出品を表したものである。繊維製品の比率が高いが、その比率は減少傾向にあることがわかる。その他に食糧・香料・アルコール飲料が多い。1685年、1724年と、食糧、とりわけ穀物の比率が急激に高まる。

全体のトレンドを簡単に表すと、以上のようになる。この時代の主要取引商品は、繊維製品（大半が毛織物）・植民地物産（香料が含まれる。その他、砂糖・タバコ等）・穀物である。

このうち最も重要なものは穀物であった。そもそも、スウェーデンは人口の90%以上が農民であったが自給自足できず、穀物スカンディナヴィア半島以外の地域から輸入する必要があった。穀物は、リーガ、レーヴァル、ボンメルンなどのバルト海南岸から輸入されたのである。マイケル・ロバーツの言によれば、バルト地方は、スウェーデンの穀物庫であった<sup>34)</sup>。スウェーデンの帝国を維持させた理由の一つとして、穀物の輸入先をバルト海地方の南岸に求めたことが考えられる。さらに、こうもいえよう。スウェーデンは主要産業として鉄の役割を増大させ、その一方で、食糧生産の重要性を低下させ、穀物を大陸側の領土に依存するようになった。スウェーデンの鉄輸出の伸びは、スウェーデンが「帝国化」することによって初めて可能になったのだ、と。

34) Roberts, *The Swedish Imperial Experience, 1560–1718*, 105.



表3 スウェーデンからのタール輸出货量 [単位] 1,000 トン

年 度	ストックホルム	%	東ボスニア	%	全 体
1738/40	28.3	65	—	—	43.4
1741/50	47.8	73	—	—	65.1
1751/60	65.3	79	—	—	83.0
1761/70	68.7	77	3.6	4	88.7
1771/80	68.8	69	14.5	14	100.5
1781/90	79.2	64	25.3	20	124.5
1791/1800	84.0	63	32.5	24	134.0
1801/08	87.9	62	33.4	24	142.3

[出典] Staffan Högberg, *Utrikeshandel och sjöfart på 1700-talet: Stapelvaror i svensk export och import 1738–1808*, Lund, 1969, s. 161, Tabell 5:4.

### 3. スtockホルムの地位の低下

近世のスウェーデン貿易では、ストックホルムが突出した地位を占めていたことはいままでのない。16–17世紀においては、スウェーデンの中で、圧倒的に取引額が多い貿易港であった。しかし徐々にではあるがその地位は低下し、ヘクシャーがつとに論証したように、輸入面に関してはイエーテボリの重要性が増す(表3参照)<sup>35)</sup>。しかしそれと比較すると、ヘクシャーがあまり目を向けなかったことは、たぶん、タール輸出を通じた東ボスニア湾の自立化傾向であろう。この二つの現象により、ストックホルムの地位は相対的に低下した。本論では、その様相を、ヨーロッパ経済・スウェーデン経済の変化と関連させて論じたい。まずは、東ボスニア湾から論じよう。

#### a. 東ボスニア湾の自立化

ここでは、東ボスニア湾の経済的・商業的重要性について触れたい。この点での画期的業績として、オーケ・サンドストレームの研究が挙げられるのはいうまでもない<sup>36)</sup>。ボスニア湾の最奥に位置するトルネオーと、当時ヨーロッパ最大の商業都市であったアムステルダムとの貿易関係について論じた本書の上梓で、ボスニア湾研究は飛躍的に進歩した。サンドストレームの考えでは、トルネオーからアムステルまで、一つの経済圏が形成されていたのである。ただし、本書以降、これといった業績が出ていないのも事実である。スウェーデン史家としてはレオス・ミュラー<sup>37)</sup>が、本書に対して非常に高い評価を出しているのが目立つ程度である。しかし、サンドストレームに続く研究は出ていない。日本では、根本聡が本書の価値を高く評価している<sup>38)</sup>。

35) Eli F. Heckscher, *Svereiges Ekonomiska Historia från Gustav Vasa, Terde boken, Den Moderne Sveriges Grundläggning 1720–1815*, Stockholm, 1949, tab. 1.

36) Åke Sandström, *Mellan Torneå och Amsterdam: En undersökning av Stockholms roll som förmedlare av varor i regional-och utrikeshandel 1600–1650*, Stockholm, 1990.

37) ミュラー『近世スウェーデンの貿易と商人』。

38) 根本聡「海峡都市ストックホルムの成立と展開」, 365–39.

ボスニア湾は、とりわけストックホルムとイギリス経済にとって重要であった。ストックホルムは、ボスニア湾から輸入されるピッチ・タールを再輸出することで利益をえた。イギリスの対外的発展のために、同湾のピッチ・タール——特に後者——が不可欠であった。確かに、イギリスは新世界からタールの輸入を増大させようとしたが、フィンランド産のタールの輸入量の方が多かった<sup>39)</sup>。換言すれば、フィンランドは、中核国イギリスだけではなく、ウォーラーズティンによって「半周辺」と位置づけられたスウェーデンによって従属化された。しかしボスニア湾は、やがてスウェーデンからの独立傾向を強める。

表3に示されているように、スウェーデンからのタール輸出量は増加するが、それ以上に東ボスニアからの輸出増が目覚ましい。17世紀前半にはまだ、東ボスニアからステープルであるストックホルムにピッチ・タールを輸出しており、そこから海外に向けて再輸出されていた。1765年には「ステープルの自由」が議会を通過し、ストックホルムを代表とするステープルを通さずに輸出できるようになる<sup>40)</sup>。18世紀末には、フィンランドは直接外国貿易に乗り出すようになる。タールの輸出増がその現れである。

フィンランドはタールをイギリスに輸出していたが、イギリスの貿易統計史料である Customs 3には「フィンランド」という分類はない。それはフィンランドが1809年まではスウェーデン領であり、同年にロシア領となり、1917年にロシアから独立したからである。イギリス経済に対するフィンランドの重要性が目立たない。イギリスの史料では、タールの正確な輸入地域がわからないという問題点がある。しかしアラネンの研究からも、(対イギリスというわけではないが)東ボスニア湾の自立化傾向が読みとれる。逆にいえば、ストックホルム・ステープル市場の重要性が低下する<sup>41)</sup>。フィンランドは、1765年から外国貿易に直接従事できるようになったのである<sup>42)</sup>。18世紀末には、フィンランドは直接外国貿易に乗り出す。タールの輸出増がその現れである。

1760年代になると、ストックホルムのステープル機能が低下し、フィンランドの貿易都市が独立傾向を高めるように思われる。しかし、スウェーデンの歴史学界においても、フィンランドの経済的重要性は理解されているとはいえない。またフィンランドの学界は、自国の独自性を強調する傾向があるうえ、近世の貿易史研究はあまり行なわれていないという問題点を感じる。たとえば最近出版されたフィンランド経済史も、19世紀から始まっている<sup>43)</sup>。スカンディナヴィア全体をみて

39) 北米植民地及びヨーロッパ産のイングランドにおけるピッチ・タール交易については、Kustaa Hautala, *European and American Tar in the English Market during the Eighteenth and Early Eighteenth Centuries*, Helsinki, 1963.

40) Aulis J. Alanen, "Stapelriheten och Bottniska Städerna 1766–1808", *Svenska Litteratursällskapets Historiska och litteraturhistoriska studier* 30–31, Helsingfors, 1956, 107; ただし原文には、1765年とあるが、これは誤り。

41) タールについては、A. Alanen, *Der Aussenhandel und die Schifffahrt Finlands im 18. Jahrhundert*, Helsinki, 1957, 131; また、木材に関しては、むしろフィンランドからの輸出量が多い。Alanen, *Der Aussenhandel und die Schifffahrt Finlands*, 163.

42) Jari Ojala, "Approaching Europe: The Merchant Networks Between Finland and Europe During the Eighteenth and Nineteenth Century", *European Review of Economic History*, Vol. 1, No. 3, 1997, 323–352.

も、英文の文献では、スウェーデン系フィンランド人のオストレームの研究が目立つにすぎない<sup>44)</sup>。

とはいえ、フィンランド経済史については、私の能力の限界もあり、ここでは、おおまかな見取り図を書くことしかできない。

ヒントとなるのは、オストレームの『タールから木材へ』である<sup>45)</sup>。オストレームはこのモノグラフで、フィンランドの主要輸出品が、18世紀後半から19前半にかけ、タールから木材に変化したと主張した。これらは、ボスニア湾からもともとストックホルムに輸送されていたものである。ただどちらも、森林資源である点で共通している。フィンランドでは、比較的最近にいたるまで森林資源に関連する製品の輸出が極めて重要であった。それは、17世紀以来変わることなく続いた現象でもあった。

フィンランドの工業化は、製紙業とともに始まった。それを考えるなら、ボスニア湾の自立化が、長期的にみればフィンランドの工業化を成功させたというべきだろう<sup>46)</sup>。

#### b. イェーテボリの台頭

イェーテボリに関する研究は、ストックホルムのそれと比較するとずいぶん遅れている。しかし近年、クリスティーナ・ダールヘーデ Christina Dalhede が目覚ましい業績をあげており<sup>47)</sup>、イェーテボリ商業の発展について多くのことが判明しつつある。この都市は1621年に再建され、それにはオランダ人が大きく寄与した<sup>48)</sup>。さらに、スコットランド商人の活躍も見逃すことはできない。ここからもある程度類推できるであろうが、当初は、北海貿易が重要であった。またダールヘーデが詳細に実証したように、リューベックとの関係も強かった<sup>49)</sup>。さらにはアウクスブルクとの貿易関係も無視できないものがあつた。オランダを除けば、ドイツとの関係が大きかった。

イェーテボリの貿易は、すでに17世紀に大きく発展していたことがわかるだろう。リューベックのほか、アムステルダム、ハンブルクとの貿易量が多い。ただし、その成果は期待されたほどではなかった。同市はアムステルダムに匹敵するほどの穀物ステープルになると思われていたからである<sup>50)</sup>。

43) Jari Ojala, Jari Eloranta and Jukka Jalava (eds.), *The Road to Prosperity: An Economic History of Finland*, Helsinki, 2006.

44) Sven-Erik Åström, "The Role of Finland in the Swedish and National War Economies during Sweden's Period as a Great Power", *Scandinavian Journal of History*, Vol. 11, 1986, 135-147.

45) Åström, Sven-Erik, "From Tar to Timber".

46) またここでは、フィンランドを代表する携帯電話会社のノキア NOKIA が、元来は製紙産業に従事していたことを指摘しておきたい。

47) Christina Dalhede, *Augsburg und Schweden in der frühen Neuzeit: europäische Beziehungen und soziale Verflechtungen: Studien zu Konfession, Handel und Bergbau*, St. Katharinen, 1998; Christina Dalhede, *Handelsfamiljer på Stormaktstidens Europamarknad*; Christina Dalhede, *Viner Kvinnor kapital: 1600-talshandel met potential*, Göteborg, 2006.

48) Herman Lindqvist, *A History of Sweden*, Stockholm, 2001, 157.

49) Dalhede, *Handelsfamiljer på Stormaktstidens Europamarknad*.

50) Eli F. Heckscher, *An Economic History of Sweden*, Cambridge, Mass., 1968, 111.

表4 ラストに換算したストックホルムとイエーテボリの輸出货量 1738-1808

年度	ストックホルム		イエーテボリ	
	ラスト	%	ラスト	%
1738/40	25964	73	9830	27
1741/45	30366	75	10007	25
1746/50	27903	71	11529	29
1751/55	30726	72	11764	28
1756/60	32276	72	12501	28
1761/65	36061	63	20990	37
1766/70	31255	63	17973	37
1771/75	32704	62	19736	38
1776/80	30852	58	22388	42
1781/85	40613	60	27274	40
1786/90	37020	56	28262	44
1791/95	32100	50	32662	50
1796/1800	30586	54	26448	46
1801/05	32194	58	23511	42
1806/08	29617	50	29281	50

[出典] Staffan Högberg, *Utrikeshandel och sjöfart på 1700-talet*, 37, Tabell 2:2.

イエーテボリの地位は、おそらく1731年にスウェーデン東インド会社が創設されたことにより、大きく上昇する<sup>51)</sup>。この会社自体は他国の東インド会社と比較すると極めて小さく、年間1隻ほどの船舶を広東に送る程度であった。しかし、首都ストックホルムではない都市に同社の根拠地がおかれたことは、スウェーデンの対外貿易にとって、ストックホルムの位置が不便であったことの現れであったろう。ストックホルムの経済的地位が、スウェーデン東インド会社設立で低下したことは間違いない。

表4は、貿易税であるラスト税を単位とした、ストックホルムとイエーテボリの貿易の比率を示したものである。ここからも、イエーテボリの台頭とストックホルムの比率の低下が読み取れる。しかも、ラストに換算した輸出入量は、1738-40年にはストックホルムとイエーテボリはそれぞれ5万3,000ラスト、1万9,000ラストであった。それが、1796-99年には、それぞれ5万9,000ラスト、5万7,000ラストとなり<sup>52)</sup>、ここからもイエーテボリの台頭がわかる。

大西洋経済の台頭とともに、イエーテボリの地位はさらに上昇する。同市とハンブルクとの商業関係が強かったことも、その一因となった。少なくともイエーテボリとハンブルクの商業関係は、ストックホルムとハンブルクのそれよりも強かった。18世紀中頃、ドイツ出身のジャン・アブラハム・グリルは、アムステルダムをへてストックホルムに移住したが、もしハンブルクに行ったな

51) スウェーデン東インド会社については、Konincxx, *The First and Second Chapters of the Swedish East India Company 1731-1766*; ミュラー『近世スウェーデンの貿易と商人』, 第8, 9, 10章。

52) Staffan Högberg, *Utrikeshandel och sjöfart på 1700-talet: Stapelvaror i svensk export och import 1738-1808*, Lund, 1969, 39-40.

ら、イエーテボリを選んだかもしれない。イエーテボリは、北海貿易圏における重要な貿易都市でもあり、大西洋経済の台頭で大きな利益を享受した貿易港でもあった。地理的關係もあり、後者の点で、ストックホルムは遅れをとらざるをえなかった。また鉄の輸出港としても、イエーテボリの地位は上昇する。

## お わ り に

スウェーデン経済は、1760年代に転換期をむかえた。それは、イギリスへの鉄輸出量でロシアに追い抜かれたためでもあるが、農業革命がおこったことにもよる。つまりスウェーデンは、貿易だけではなく、農業、さらにはプロト工業化による利益にも目を向けたからである<sup>53)</sup>。ストックホルムが貿易面で衰退するのは、そのためでもある。これは、企業家精神の後退ではなく、むしろ新たな利潤獲得の機会を目指した結果であると、スウェーデンの歴史学界では受け取られているようである。しかしまた18世紀においては、都市住民の貧富の差が拡大したようである<sup>54)</sup>。

スウェーデンの国民経済の立場からみれば、これは大西洋経済と国内経済発展の重視を意味する。確かにスウェーデン経済にとって、フィンランド経済の自立化傾向は痛手であったろう。しかし同時に、スウェーデン経済は、大西洋経済・アジア経済との関係の強化という流れに適合する方向でも動いていたのである。しかも国内経済、特にプロト工業化への投資は、世界システムからみた場合、「周辺化」をまぬがれる方向で作用したかもしれない。19世紀スウェーデンの経済発展については、このような角度からの考察が欠かせないはずである<sup>55)</sup>。

それが、極東のエトランジェによる結論である。

53) この点に関しては、Lars Magnusson, *An Economic History of Sweden*, London and New York, 2006, 1-56 をみよ。

54) Erik Lindberg, "Mercantilism and Urban Inequalities in Eighteenth-Century Sweden", *Scandinavian Economic History Review*, Vol. 55, No. 1, 2007, 1-19.

55) 最近の研究によれば、スウェーデンの1人あたりGDPは18世紀の間にはほとんど増加せず、19世紀中頃に大きく上昇した。Edvinsson Rodney, "Annual Estimates of Swedish GDP in 1720-1800", *Ratio Working Papers*, No. 70, 2005.

## An Outline of Swedish Economic History in Early Modern Age

Toshiaki TAMAKI

### ABSTRACT

Swedish historians tend to consider economic history of Sweden as a history of present Swedish territory. Their attention has been mainly paid to the endogenous factors of history. On the contrary, this paper aims to reveal the importance of exogenous factors in Swedish economic history. In the seventeenth century, Stockholm was a staple to which a lot of commodities were imported and it was the key city for Sweden. However, in the eighteenth century, the significance of this city as port declined, and the importance of Göteborg increased. Ostrobothnia began to be independent after 1765 and Göteborg became a center for international trade. The areas near Stockholm were transformed from hinterland of the capital to the district for proto-industrialization, which was to form the base of the development manufacturing industry in the nineteenth century.